

833-6

俳諧資料カード

年代

大正四〇年

編者  
(筆者)

凉谷

書名

俳諧詩万葉集

備考

初稿

(下垣内蔵)





拾美句集序

卷之九

世乃為之

之  
一  
帝  
教  
子  
孫  
之

今をゆゑにとて

[illegible]

小  
7  
5  
2  
1  
環  
乃



なればふに時をさう  
あふ又もみせさう  
かゝるふと一かおも  
つるもいとおふあり  
まねる年といふあは  
まにへともあはハの  
まにへさるハの

あ代をさうも甲時を  
あふあふあふあふ  
るな——さる人  
さるいっさるさる  
さるさるさるさる  
さるさるさるさる  
さるさるさるさる



水邊に月を小窓に照らす  
 春の如きののはたふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと  
 ふとふとふとふとふとふと

類題十萬句集初編春之部目錄



春之上

元

日初丁

元

朝二丁

立

春

初

空

初

雞

初

鳥三丁

初

日

今

朝

明

春

花

春

君

春

玉

春

年

春

菴

春四丁

年

立

年

玉

御

慶

年

始

禮

者

初

曆

初

夢九丁

寶

希

御

降

蓬

菜

喰

積

門

松

門

饒六丁

松

内

若

水

若

夷

糸

七丁

春



屠換 太箸 懸想文 寶引 藏閑 羽子 小正月 小松曳 牙返 雪解

穗俵 雜煮 弓始 福曳 今年 萬藏 粥杖 子日 養父入 春寒 春雪

みし看 大七 着衣 水祝 左義長 猿曳 正月 七種 傀儡師 殘雪 初霞

鏡閑 年男 謠始 破弓 飾焚 手鞠 正月 人日 餘寒 淡雪 霞

長閑 遲日 系遊 几巾 佛坐 土筆 福壽巾 白梅 椿 鶯 蛭

永日 暮遲 東風 若菜 姫菜 落莖 木芽 柳椿 落椿 鶯 蛭

暖 水母 春風 薺 鶯菜 落芽 梅 挿柳 猫 雲 海苔

麗 陽 春 芥 若草 野梅 松花 百千鳥 駒鳥 卿尼







彌生 霜櫻 雨花 梨連 藤鳥 螫行  
八十八 九十三 九十九 百 百二 百三  
春 生 櫻 雨 花 梨 連 藤 鳥 螫 行

春竹麥山辛杏花遲別雛  
暮煖鷄吹夷見櫻霜

雞 合 八十七  
桃 八十九  
花 九十四  
木蓮花  
木瓜  
茶摘  
艸麥 百五  
若 占 百六  
三月  
春題不知 百八

洞海舍涼谷編  
一具菴一具校令

元  
日

元日之方今之万民待色也  
 元日の日出多し多し於森哉  
 元日之方今之梅も折れぬ  
 元日之古交氣もや常々盛  
 元日之古交氣もや常々盛  
 元日之方今之親持もや  
 元日之方今之親持もや  
 元日之方今之親持もや

江戸  
 素心  
 大梅  
 一蕙  
 碓嶺  
 多女  
 涼谷  
 一具

陸奥  
 常陸



出羽

一甫

香山人志通志看

民城

石臼や碓うす茶臼猫の飯

陸奧

左琴

香山人物志

夕  
山

元白此於常也起之のみ

趙後

芭  
角

有子起之空

九  
陸

石也又一口増とある

江占

不  
推

石鼓文

元日や、きつと正月六日の候

千  
叔

石や石交交山の

十

立春

南部

清

元朝の松の影を以て墓壘と

帝姓

素來

元朝や

去

元朝人物七

吟

喜々や電の上手聲の声

越後

香山

喜立やあり出立栗子内江橋

孔正

有之枕席のふしの

千  
輅

市産名産と集立軒の缶水ノ形

一  
臭



初空

初雞

初鳥

初日

今朝春

初うへに四すゝめをくみしき  
あけふもあけふも居る家や初馬  
あけふもあけふも居る家や初馬  
伏ねせ侍や初りたあつち  
とろりと初りていひはる家  
松林をさしていひはる家  
今朝の春上は八重の上野うれ  
梅松の匂い漂うとそよ風の春  
年寄とていふ人々いふに初馬  
いふに初馬いふに初馬

陸奥 二晶  
江戸 達流  
出羽 祖世  
江戸 丁知  
孝隆 民校  
江戸 周慈  
玄く  
一具  
川長  
樂水  
大費

陸奥  
出羽  
江戸  
孝隆  
江戸  
孝隆  
江戸  
孝隆



明春

花春

君春 玉春 年春 宿春

中々初春の春を待てや 明の春  
 久蔵 出羽 江戸  
 久蔵 茶徑 月峴 一蕙  
 陸奥 父和 雨考 木司  
 越中 越後 羊山 鼎湖  
 上毛 信濃 葛松

菴春

年立 師慶

考々々々 菴も 菴も 菴も 菴も  
 出羽 江戸  
 千之 椿海 芳谷 五峴 永木 野巢 一蕙 卓郎  
 江戸 出羽 越中 越後 上毛 信濃 葛松



江戸

素標

了是

松塢

梅雪

妙  
星

鼎

一  
4

南

桐

妙

大

禮者

初曆

揆之世何如也 學之佐曆

越後箱腰

葵雨

その時より今に至る迄と初曆

三

多矣

母の手に持てゐる目もさし  
初鴈

陸奥

易

會健根の雪や新雪は初より

越後

字

芳賀の川出をさるやちの勝

初夢

そのまゝや舟持衆の前移入

江戸

五  
峴

戶部知之相在後受於劉忠壯公

梅宇

竊人作之乃之萬一舟

香叢

宝  
船

此障や大いゝ字折願と

茶歸







松

障子の何う障子——松のうち

多よ女

窓のうち障子易きや松の内

羊山

持たし〜酒後ちやうどつゝ月

京生江戸  
越後

節之

束の帯の扇は〜や片の月

宇植

松の〜ちゆけ〜を志ん夢

文里

子竹市の物号を合や松の内

月峴

あゝや〜やの燈は星一ツ

江戸

曾見

若水を汲み兼て新雪は

常陸

五峴

四已斬の笑ふゆゑは情あり

古川

丁知

若水を汲み〜や一花を

若水

丁知

若水

若水市人の若水を見たり

若水

丁知

若水

掌子〜護摩の供物や〜若水

越後

ちやうど

若水

以秘傳もや〜人々を〜色

上毛

荷了

若水

定む〜笑ひ初る〜我の妹

江戸

栗箕

若水

穂儀の〜前を〜と〜

江戸

亮掲

若水

〜我の妹の〜友の〜看

日光

椿海

若水

水〜めや〜後を〜まの香の物

日光

石荷

若水

右箸〜を〜や〜を〜よぬき式

日光

史千

若水

右箸〜と〜持〜を〜や〜襟扇

日光

葛蘿

若水

箸〜を〜柴の〜を〜難考〜

江戸

素心

若水

難考〜〜娘〜と〜柳子〜と〜

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸

四葉

若水

雑煮

江戸

素心

若水

雑煮

江戸

荷乙

若水

あの〜を〜持〜り〜喰〜ひ〜難考〜

京生江戸



大福 年男

魚想文 着衣始 淫初 宝引

子を抱く難者の様と向はる  
 大釜の湯わきと春巻くく  
 大姉くを春くかたるや孫改  
 と男初くくわく一徳くは文  
 年男豆く様くく一徳くは文  
 横やと止那くくろの手男  
 魚想文子の手あくを恨く  
 子始解の意者もあはる  
 骨の事ぬけく様くく一徳くは文  
 わんを子く様くく一徳くは文  
 宝引のすく様くく一徳くは文

一雅 石符 干輜 小圃 呂洲 范父 越女 木司 蕙近 多女 杜年

福曳

水祝 破魔弓 藏開 今年 左義長

宝曳や大馬柳の成り  
 宝引やつりく出く様くく  
 福曳や思ひ様くく一徳くは文  
 福引や持くくもあはる  
 福曳ややうきくく一徳くは文  
 水祝は情のときく一徳くは文  
 破六の謝禮くく一徳くは文  
 呂あくく様くく一徳くは文  
 今年くく一徳くは文  
 左義長くく一徳くは文  
 宝引くく一徳くは文

民権 大木 多女 呂洲 范父 越女 木司 蕙近 多女 杜年



借焚

とんと

萬歳

左家右や面う傳へても同あゝる  
 吉例は庄屋の畑や借も  
 畑配の夕やけや飾も  
 うまう焚きも飾も  
 族人のききも若き人  
 若きもとんと風工部  
 家もやふに族を焼く  
 家もやあやう族を焼く  
 家もと列座を来し給仕人  
 万やと飾もきき先願う  
 右貸り家も并ん山の城

越後 宇弘  
 江戸 万里  
 出ハ 何年  
 友之  
 多よ女  
 知機  
 江戸 例山  
 阿波無戸 太拳  
 多男  
 民校

猿曳

手鞠

家もや面う傳へても同あゝる  
 吉例は庄屋の畑や借も  
 畑配の夕やけや飾も  
 うまう焚きも飾も  
 族人のききも若き人  
 若きもとんと風工部  
 家もやふに族を焼く  
 家もやあやう族を焼く  
 家もと列座を来し給仕人  
 万やと飾もきき先願う  
 右貸り家も并ん山の城

上毛 棟  
 陸奥 祖所  
 栗箕  
 樂水  
 赤風  
 越後 巨童  
 江戸 有月  
 常陸 旭丘  
 南丹  
 家元  
 黙巢



羽  
字

正月  
粥  
杖

似煉のうさも私あの手鞠を  
 立湧くくはく手まりの  
 老翁子井戸の端傍落し一  
 やりもてやて人よりさる松の枝  
 羽子に返る手影のやもえり御に  
 実をばん羽子の字帯よりさる  
 着あつてもとかし氣に羽子の友  
 完る人粥杖に折るもろ  
 正月の宵露をさめやハの  
 ありや火鉢煮床のさる附  
 脱おけぬ西月香や小四の家

越後

越後

江戸

笑 壺  
 禾 木  
 四 葉  
 其 子  
 古 習  
 曾 々  
 一 具  
 曾 兄  
 桐 兩  
 湖 山  
 鼎 湖

ありの月さるく西のく  
 正月もさるく人の歌  
 窮屋を西月さるや薪の雪  
 西月や長煙一通不煙字  
 西月の忌世よりさる御具  
 西月さるくくさる仙智  
 著のきて西月さる柱  
 西月や薪さるくさる  
 西月や去さるくさる  
 西月もさるくさる  
 西月もさるくさる

陸奥

出羽

江戸

越後

蕨 丘  
 薪 水  
 一 竹  
 木 公  
 長 校  
 祖 所  
 鶯 堂  
 文 光  
 左 未  
 千 輪  
 文 菊



睦月

正月やあつても春相火桶  
下子宿て二階と吹んあ月  
登るのまの生交の睦月  
就中家内滞りた睦月  
私一様ふたねまふあ月  
出来た吹んも睦月の月  
掌子宿りたるあ月  
その忘れするあ睦月  
あさ雪のいりてあ月  
縄も移のゆきもあ月  
をくくの倍くをくあ月

大貴 一具 椿海 月岨 多女 全 才司 信濃 武藏 貞雄 木司 玄く

小正月

初子日

七種

初を降くも一担移や小正月  
振舞の先も移舞や小正月  
松を雪よりあたる初子  
州菴も初も子の面  
松の中子の松の通  
了家の後一たる子の  
浜松も並つて海子  
七種の松子より田舎  
七等の松子より田舎  
七竹や雪やあたる  
荒砂も七等の初

碓嶺 椿海 樂水 千輅 湖 多女 之厚 道雄 京谷 以吉 湖 江戸 下七 上七







餘寒

雪の残もまだあるをそよ風傀儡の  
 手入の餅搗多るる餅屋  
 古曆をそよ舟の余雪をそよ  
 雪の木のあまの限るぬれ  
 双六の石目もぬれ余雪をそよ  
 柳もぬれ板きくそよ余雪をそよ  
 燠火のもそよハチエのようん  
 残雪をそよ柳の市をそよ  
 雪をそよ風もそよそよ余雪をそよ  
 雪をそよハチエのようん  
 雪をそよハチエのようん

小形南部

出羽

江戸

多由女  
 石碛  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺

春寒

次返

殘雪

淡雪  
雪解

春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風  
 春寒のそよ風もそよ風

江戸

陸奥

越後

上毛

武蔵

出羽

江戸

謝堂  
 長茂  
 布席  
 更川  
 牛輅  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺  
 碛嶺







山の石を夏にけりや露の香  
 露世めく燈色の中りまの香  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや  
 露の香に露の蟲の鳴るや

下毛 布席 一夢 麻衣 白起 武藏 昨木 水得 巨童 笑壺

初霞

霞

雲の斗を移るやとるの香  
 雨雲と雲を移るやとるの香  
 提てり豆腐の上や春の香  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや  
 春の香に春の蟲の鳴るや

出羽 黒白 桃機 古川 昔谷 友之 名お 玄く 孔正 素考 ちやめ 生世



出羽 下 江 常 江  
羽 倭 戶 陸 戶  
一 荷 雁 扇 荷 冬 一 荷 雁 一  
松 杜 松 五 扇 荷 冬 一 荷 雁 一  
崇 年 竹 風 卷 坐 橋 蕙 乙 嶺 具

方如女 一夢 吳洋 布席 鼎湖 和琴 大梅 卓郎 民枝 莢雨



越後

長

永

松

高

篠

祖

木

高

谷

全

つら先人の事宛留の井第  
定王帳や以事却るゆゑ  
風上のあゝゝ雲を巻く  
戸を閉て鼻は利なり  
松林て度きゝ雲せ禁り  
はるゝ御崎や松の夕雲  
朝夕の雲も癖あり雜木山  
昔も屋もまじりて成て雲  
朝の夕よりつも雲も煙山  
二夕より能はるゝ雲あり  
江は井あり一お出さる雲あり

江  
管  
破

山甲より猫呼ありも雲あり  
雲より片中より雲あり煙あり  
系掛の先種より雲山あり我  
名をまを仙の山より雲あり  
物よりぬ雲もも雲あり夕雲  
破列も松や毎日も雲あり  
霞やや雲の出あり  
雲あり霞あり程あり雲あり  
中より雲ありの丈ありと遠より  
あゝゝあゝゝ雲あり雨のあり  
雲より鳥も鳴る雲あり

陸奥  
常陸

乙  
三  
槐

杜  
丰

茶  
月

柳  
美

稻  
美

全

毎  
女

佳  
好

云  
々

全



危殆の震をききしは  
 揺る子の一群は震を  
 居根草の震をききしは  
 山つの棟よりくわくわく  
 生葉の白く揺るる震を  
 谷あいの松や震のくわく  
 夕雲の揺るる震をききしは  
 一おれ震をききしは  
 震をききしは

箱被 全 孔 鷺 五 素 東 西 全 全  
 竹 全 正 笠 岨 有 標 令  
 岫

山松の揺るる震をききしは  
 小田の雀一足は震をききしは  
 志の揺るる震をききしは  
 柿の木は震をききしは  
 穀の揺るる震をききしは  
 炭竈の煙も震をききしは  
 ハ景の震の中や揺るる声  
 新築の揺るる震をききしは  
 震をききしは

常陸 陸奥 江戸  
 秀 竹 雨 深 一 羽 梅 李 露 揚 全  
 浦 里 村 月 幸 白 周 朗 什 花



江戸 越後 下総 江戸  
土川 桃機 登浦 雨木 伸女 青塚 一甫 菜瓶 五和 一幸 丁山女 江戸

日永

粟笑 榮驛 千菊 白起 一夢 多女 椿海 卓亭 水仙 有水 箱彼 出羽



暖麗遅  
り

水も清く伝やうあゝ雪も  
静けさのあつて一倍り水も  
ふとあまらうこのわたり水も  
つゆのはさるゝ水も廣く  
あつたふとあつた水も  
あつたふとあつた水も  
あつたふとあつた水も  
あつたふとあつた水も

祖原 伸女 道雄 今 雪 元 南枝 得 常 常 民校

芳遠  
陽火

友朋うて芳遠を田面  
う声の細密を芳遠を  
う毎ふとあつた水も  
芳遠を芳遠を芳遠を  
芳遠を芳遠を芳遠を  
芳遠を芳遠を芳遠を  
芳遠を芳遠を芳遠を  
芳遠を芳遠を芳遠を

武藏 文来 拍樹 南 貝谷 理栄 大梅 栗笑 市席 李席 野



原遊

佐保姫

陽光のけしきや待合の落席すけ  
 うけあやうけ出根のまき  
 吹雪や鼻緒の延る皮草鞋  
 うきうき人のちうとけあきしん  
 原遊やあやうきなまき  
 原遊やうき紫雲の鏡の中  
 原遊やうきあきあき  
 原遊や女侍あき  
 原遊や態様あき  
 原遊やうき人窓の窓  
 佐保姫の世並けや  
 原の原

常陸 五竹  
 一幸 蚕圃  
 椿海 巨童  
 杏園 上毛  
 旭丘 箱根  
 雨芳 景平

東風

春風

佐保姫や舟の原の原  
 吹雪や鼻緒の延る皮草鞋  
 うきうき人のちうとけあきしん  
 原遊やあやうきなまき  
 原遊やうき紫雲の鏡の中  
 原遊やうきあきあき  
 原遊や女侍あき  
 原遊や態様あき  
 原遊やうき人窓の窓  
 佐保姫の世並けや  
 原の原

越後 東及  
 裁星 東橋  
 雨村 茶新  
 麻交 原流  
 大宮 白起  
 夜雨







挂丸  
八重女

素考

陸奧

一  
兩

松竹

尺山

友來

松  
巢

金

得

上毛

江

兩  
僅

民校

陸

桂  
裡

鹿  
方

全

川長

旭立

二  
晶







小舟甲も旅と云ふくく一妻の面  
妻面の夢をゆく相の花より来  
妻面の相くくくく旅屋に  
菩提樹の徳利をくくくく  
妻面や翠簾客をくハツリを  
蓬生より大風寒や妻の面  
妻面の夢をくくくく飛の声  
松に女人の袂やくくくくる  
切き巾や町の中城一里塚  
乳母の乳を離るくくくく  
又くくくく八舟も動くくく

越後

玄人常萬年  
子田萬年  
抱琴  
雲巢  
文教  
南

身も膝も吹れて巾の日毎が  
 巾の尾や巻くまゝはの上  
 後くの手附多し巾  
 着のし風のまゝや巾  
 外極は月のあや巾  
 方々の白く並べ巾  
 切きて粒粒しよや巾  
 切きて巾の底とあるや一々回  
 松風をまわし上をうのあや  
 標座に夕々の風や巾  
 蓬生や夕暮をあらん巾

吳洋 布席 高少女 辛雄 旭丘 量山 芳蘿 萬所美 雨芳 蚤浦 夢芝



江戸

庚午

わやくと巾箱を新機と云

大山

巾箱の跡をいふもはなれぬ

南月

初ま巾箱も増え格う云

戴星

新まや店舗の松ふり巾

谷

巾箱の子信の中や角力に

帆

巾箱を程と海客舟跡に宛

月

尻をよ移も顔くつろのち

旌

宿鼻の形くもや巾箱

名

きれ巾箱の果やあこいの夢を

山

切も巾箱の木敷をあり山

笑

若菜

巾箱の尾よりやきり旭れ

管版

蒼丈

まや二人やわやの烟を

抱琴

戸にまき雪時居る若菜式

道雄

有觸と物の目出なわれぬ

節之

茶島や若菜摘みし唄あり

今

わな摘みしや後まき

羽白

提て雪を舐めも若菜式

雨村

摘みしや若菜式

左来

若菜摘みしや若菜式

一具

雪を無きやきりわや式

一具



胸の氣を束くく構わぬ式  
 構へ来るのくゆる若菜れ  
 組板の音はくく乗わぬ  
 一まき若菜斗の徑く  
 有里ふふ若菜やわれの  
 付くく若菜くく若菜  
 内室の手繰くく若菜  
 若菜人くく若菜  
 川初く向くく若菜  
 一白く構わぬ若菜  
 恒城く若菜く若菜

常陸 一 飛  
 上毛 鳳石  
 松偽  
 布席  
 民校  
 今  
 ハ朗  
 古抵  
 知さ雄  
 為古

薺

船中を眺めくく若菜  
 船中の香をくく若菜  
 多ぬ常は構わぬ若菜  
 窓処くく若菜  
 一付くく若菜  
 船をくく世の若菜  
 世の若菜くく若菜  
 人くく若菜  
 若菜くく若菜

箱根 愚本  
 江戸 一 機  
 椿海  
 桐雨  
 吉風  
 以吉  
 二槐  
 南  
 鼎湖



出みのみそ自出なるもの  
みそすけの時刻なるもの  
ほろの中へあるもの  
組木の足入物なるもの  
口上を更なるもの  
荒れぬもの  
竹の戸や中へあるもの  
蘇木や木のききや人西  
組木のものを目やなるもの  
くしきなるもの  
お隣のききなるもの

卓郎  
葉操  
雨撞  
貝谷  
民技  
羽人  
雲翠  
殖花  
政香女  
夕山  
芳谷

芥

へて木子鏡もききしもの  
葉操と時刻なるもの  
葉なるもの  
組木のききなるもの  
中へのききなるもの  
金なるもの  
窓のききなるもの  
ききなるもの  
ききなるもの  
ききなるもの

陸奥  
竹葉  
赤葉  
金  
玉和  
永木  
大費  
所葉  
大樹  
挑馬  
人  
其木











陸奥

曰人

立る者より附あてゝや福壽中

荷心

行燈のあく持出ん福壽中

積翠

掌々土の乾々や福壽中

一之

素の布より足持出ん福壽中

乙亥

又あゝとあゝ福壽中

孔正

福の事て店々上々福壽中

節之

解遠よりあゝ人々や福壽中

鳳毛

袴着てあゝあゝ福壽中

芝菜

そ福壽中

木司

小冠中のあゝあゝや福壽中

左琴

木芽

若々あゝ九々福壽中

祖中

襟中のあゝあゝ福壽中

露竹

肩のあゝあゝ福壽中

笑壺

あゝあゝ福壽中

美父

今朝もあゝあゝ福壽中

鶯御

気の付いたあゝあゝ福壽中

仲女

右教亦恒福々や福壽中

乙亥

猪小屋のあゝあゝ福壽中

大費

とんとあゝあゝ福壽中

茶靜

爪先のあゝあゝ福壽中

子齊

あゝあゝ福壽中

三平



梅

古曲様へ出づ近き木の葉を  
おの葉よりけや深山は 院 訪  
新々たる木の葉を又花皮ぬくも  
芽を張る木の骨に世之々  
と雲の葉をよ梅を葉に重  
ねけりや旭一富士梅うむ  
梅のを雄球を恒福くれ  
の五輪をはさみ帯や雲の梅  
来くよあけの里や雲の星  
あふふふ隙をあかす梅えが  
婿梢を帯て斬もつたうち



本橋  
笑張

何處となく白く来る雪の梅

字  
川

細乃寺上人の書

扇花

板橋と盆比咄の中

聖學

行是なり 夢庵より 来々 梅の花

全

學友を以て同志と志すは梅の香

天年

梅子兒所食之為種今入

康和

横正松

台榭

梅子生香老

2 va  
半

菜種子 椀の市々や梅の花

東井

而るゝ限ぬや梅の巻

嵐  
氣

育自々自以てゑゑに梅の樹

米

此頃も玄亭の病は梅の如

惡山

夢中も来何人 右持鉢の梅

文  
家

山石梅之東施子侯子侯

強平

山の嶺を内を流るる溪のほとり

全

石塔と梅の中より春の光

雨

子又抽の

今

生々樹々

包土  
後周

精於此道者

相傳

和  
張  
開  
人  
吳  
林

卷之六











文骨 了生 方氏 大費 今 川長 錦哉 葛松 棟

下  
恒

松秀 殖 不 曲 永 陶 烟 如 蓬 石 苻 惟 艸 龍 化 蓀 虎 咫 雲

箱館



紙燭してゐるや緋の黄ひ梅  
 梅咲て梅もあまきやれ  
 新中道旁うき香て梅の月  
 有きやうい月のはる美の梅  
 少く月満のほくや梅のや  
 行きの不二なう梅のや  
 夢うもの隙子あはく梅のや  
 春ふ布し梅の梅の月梅の  
 梅咲や夕夢をふお後し  
 一見うて梅の梅の梅の  
 梅咲て梅の梅の梅の

上七  
 砥雲  
 茅九  
 畫半  
 阿兮  
 雲美  
 羊山  
 千之  
 松井  
 易半

梅咲て梅もあまきやれ  
 新中道旁うき香て梅の月  
 有きやうい月のはる美の梅  
 少く月満のほくや梅のや  
 行きの不二なう梅のや  
 夢うもの隙子あはく梅のや  
 春ふ布し梅の梅の月梅の  
 梅咲や夕夢をふお後し  
 一見うて梅の梅の梅の  
 梅咲て梅の梅の梅の

常陸  
 一之  
 今  
 夕山  
 只办  
 南石  
 船平  
 東止  
 古川  
 月  
 芳  
 確穴















大 小 大 蚕 今 水 禾 田 周 什 蒙  
費 尤 費 浦 水 水 禾 穗 穗 里

田の畔をあるく向ふ梅のやい  
 律の梅や梅子工のあつてよ  
 尖るそとく折るそね梅枝  
 空をさするや一梅の一ツ咲  
 数ふけく二月一もく梅枝  
 霜もくを失く折る梅枝  
 律の梅は吹雪や朝の内  
 望の梅は夕煙を随て折る花  
 曲る梅のやのあふ空梅のそ  
 那の梅やわたる梢の折梅  
 数くくふふ梅や比叡庵

田 藩 石 民 粗 今 月 乙 丰 昨 今  
 茅 平 苻 校 年 峴 亥 圃 木







青柳や下ゆくゝの爲煙  
 新ふは柳して行 柳今  
 傍くくきく藤よりなる柳これ  
 橋うへは足踏やけね柳うそ  
 余夢の田こころ出がき柳これ  
 古きよ人のけくねやあきうき  
 け藤の屋根舟はあく青柳  
 海苔藤あの中き藤き藤柳  
 瞳まや隣り柳き藤柳  
 うねあきすくも近き柳これ  
 夕新の物瓶よりなる柳これ

下徳  
 植芽女  
 竹葉  
 雀堂  
 宇喜  
 荷乙  
 宇喜  
 涼蔭  
 五呪  
 吟露  
 文廣  
 一甫

立寄てもきく柳の糸  
 花の面よりなるやあきうき  
 枯きくねうきき藤柳  
 大柳 やき記きも中へき  
 屋根蔓の絡ひ上る柳  
 是代の柳も来柳これ  
 ねくく柳きく柳  
 芽柳や南隣を明や交  
 隣地を丸く抱き柳これ  
 多きあき人けりち子の遠柳  
 新柳き人もき藤なる柳

上徳  
 文和  
 寛三  
 五呪  
 玄  
 旭  
 梅周  
 如光  
 了庵人  
 蚕浦  
 全







二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の  
 二里半のそとへはなる柳の

江戸

笑 五 松 杜 謝 杜 其 其 乃  
 笑 五 松 杜 謝 杜 其 其 乃  
 笑 五 松 杜 謝 杜 其 其 乃  
 笑 五 松 杜 謝 杜 其 其 乃

大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の  
 大石の屋根を足紙の柳の

下然

民 卓 大 鼎 今 多 布 粗 荷 麻  
 民 卓 大 鼎 今 多 布 粗 荷 麻  
 民 卓 大 鼎 今 多 布 粗 荷 麻  
 民 卓 大 鼎 今 多 布 粗 荷 麻



飯前の酒を酌するやふうれ  
き柳や羽織の土手の上  
き柳や依傍の外傍に  
照安ま影くぬき柳の  
直ぐく寄くくる柳の  
分前のそまきう寄  
芽柳や延まらう寄  
え寄をいそまき柳  
き柳を寄のふあ寄  
寄の稀のやう風く柳  
物くく寄まくく柳哉

岸 陸奥  
三平  
素考  
幸雄  
如仙  
貞雄  
長彦  
永男  
松平  
永水

二羽連なりたる柳の  
幣はをおあ金の寄系  
き柳や面う打く中寄  
るの中寄寄たる寄や  
舟待の制れをよむ柳  
小生あつ葉烟あつ柳  
稲あつた寄寄たる柳  
素人毛柳を寄通る  
一二軒をや灯を燈る柳  
うけ寄やの場寄をえ寄  
柳を寄寄くわのりわ

大柳 寄井 文宛 冷 羽 西阜 千輅 双二 槐機 全 南







椿

松のち月さく古くもお花  
 中流の春もぬけ出て古橋より  
 新のちありふたや松のち  
 田も作る醴酒や未花もき  
 掃よきてるよおと椿の柳  
 雲白の影の初の花もふた  
 白くして石の橋の椿の肌  
 義のちのほろもあふの椿のち  
 一月もさくふた椿のち  
 ちりぬ椿のちふた小庵の  
 葉のちの椿のちふた

陸奥

常陸

麻 変  
 ハ 菜  
 萬 葉  
 夕 山  
 素 有  
 赤 谷  
 葉 三  
 木 公  
 道 権  
 玄 々

一、ちりぬ椿のちふた  
 傀儡のちふたあふちの椿  
 中流のちふたも同椿の  
 折とちのちのちふたき式  
 一の椿のちふた椿のち  
 義の椿のちふた椿のち  
 下ちのちふた椿のち  
 葉のちの椿のち  
 つやきとちのちふた山色に  
 古橋のちの椿のち  
 酒のちの椿のち

今  
 松 窓  
 田 第  
 梅 堂  
 文 海  
 風 石  
 涼 谷  
 素 櫟  
 涼 谷  
 熟 菓  
 今



あゝ人の名れを捨てて  
屋根の上れ橋をきく  
路の隅に  
中絶して  
空舞を  
煙霧の  
もつれ  
おき  
あゝ

八重子  
米月  
祖印  
乃華  
京府  
左氏  
ちき  
羽人  
確花  
文花

落椿

あゝ人の名れを捨てて  
屋根の上れ橋をきく  
路の隅に  
中絶して  
空舞を  
煙霧の  
もつれ  
おき  
あゝ

一西  
相我  
三槐  
乙貧  
石符  
川長  
鼎湖  
乙彌  
芳居  
玄々  
雪笠



猫意

此種の意をいふや落橋  
 猫の意第一て猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫の意  
 何れも猫何れも猫の意  
 猫徒の意をいふや猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫  
 何れも猫何れも猫の意  
 猫の意をいふや猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫  
 何れも猫何れも猫の意

陸奥

南山 一具 谷後 慈榮 方居 遜流 謝堂 麻交 布席 多妻 禾木

此種の意をいふや落橋  
 猫の意第一て猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫の意  
 何れも猫何れも猫の意  
 猫徒の意をいふや猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫  
 何れも猫何れも猫の意  
 猫の意をいふや猫の意  
 何れもなまきりも何れも猫  
 何れも猫何れも猫の意

常陸

范父 三平 旭丘 不曲 万里 阿兮 月峴 雲翠 菴和 赤月 荏帆



## 白奥

五巻の月書ももわきね男猫式  
 民片今隣もほろや猫の窓  
 猫の急屏風の肉の言祝詞  
 患猫の跡もあうう白小袖  
 る和もまきう一巻猫の患  
 通ひ来々世の肉の猫と家上虎  
 下弦足弦書く中や猫の患  
 一寸のんもさうく金ある  
 友もや細中をもさの泡  
 友達の来々子調交ある  
 恒統りももまきや根来様

素心 五峯 田筆 若水 常盤 今 侯前 田筆 林雪 字川 寸所

## 百千鳥

鶯

友もやとんもさうく斗や解く  
 白奥の嫌のさうやわの橋  
 万の鳥山此曙もあは  
 若やや面友先や子推もも  
 ういすや燕利もももも  
 鳴ももも常盤も他のも  
 常や御車のもももも  
 所志つすも常盤ももも  
 若やや古ももも切通  
 ういすやわの解ももも  
 若やや隣も一巻ももも

湖山 花甲 丁方 一皇 史子 凉谷 若所 南海 桐南 一具







黄子慈て加茂まゝ来り危  
 管や盃より例をなく  
 白出して管鳴や枸杞の中  
 うんばをゆてすすむや一歩片  
 朝白の止黄子の遠きうれ  
 管の二羽集て一羽をうき  
 黄子子朝露の白をくくそ  
 管の曙こあけ羽振る  
 黄子此来ぬや窓の忍山  
 此其のゆ管をくくもいふ  
 内おは黄子のあけ立柳式

荷月  
 ハ栗  
 今  
 南く  
 一夢  
 今  
 栗笑  
 異洋  
 布席  
 多よ女  
 今

上能遊あけれ管を居る  
 管や片のり振る小半の

二ノ

管の二つ鳴けいさく初る式  
 鳴けを管屋連はからせり  
 黄子の初きやうく地盤に  
 うんばや黄子を傳ふ初の終  
 管や新の初きもふく  
 黄子子初を初く橋うき  
 二ノ集て管二羽のうき  
 管や初るや月の枝楊り  
 黄子や初の出張を町様

湖  
 氷谷  
 久藏  
 木  
 木  
 民枝  
 碩市  
 文骨  
 日人  
 幸雄  
 ちうき



陽うふとそきひ常のふきふ  
 黄ちふふふふふふふふふ  
 常の明れふふふふふふふ  
 うふふふふふふふふふ  
 常れふふふふふふふふ  
 黄ちふふふふふふふふ  
 うふふふふふふふふ  
 旅路一帯一帯一帯一帯  
 常の母ふふふふふふふ  
 黄ちふふふふふふふふ  
 常ふふふふふふふふ

管絃

大 黄  
 旭 正  
 暮 松  
 如 仙  
 廣 翠  
 松 秀  
 今  
 松 索  
 雨 明  
 花 甲  
 芳 菴

黄ちふふふふふふふふ  
 常ふふふふふふふふ  
 黄ちふふふふふふふふ  
 常の明れふふふふふふ  
 うふふふふふふふふ  
 常れふふふふふふふふ  
 黄ちふふふふふふふふ  
 うふふふふふふふふ  
 旅路一帯一帯一帯一帯  
 常の母ふふふふふふふ  
 黄ちふふふふふふふふ  
 常ふふふふふふふふ

陸奥

出羽

本 司  
 瓶 乙  
 雄 龍  
 政 安  
 石 持  
 木 水  
 昨 木  
 元 分  
 松 和  
 二 立  
 南 山



鶯の聲をきく。鶯の生を  
うけり。鶯の歌を聞く。小鳥の  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。

笑 西 一 一 田 一 一 深 子 双 文 桃  
壺 阜 陽 陽 集 幸 自 輪 二 例 機

鶯

鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。  
鶯の歌や。鶯の歌や。鶯の  
歌や。鶯の歌や。鶯の歌や。

葉 木 蚕 吟 今 涼 布 多 民 如 桃  
路 木 浦 震 今 谷 席 女 枝 蓮 機



雲雀

曉空のつゆにけりや春の声  
雲をいもあふやうに春の柳を色  
舟の艣の柳子柳のや柳を雀  
標るや雲を雀の鳴通し  
月代の刺しよし 鳴を雀  
足定てうきうき安あをうき  
麦喰るおの気うきあうき  
川柳の雀うきあうき鳴を雀  
大空の雲雀あうきうき下四うき  
春の雲を雲雀 廣くよ雀を雀  
横よ雀を雀もうきあうき橋の上

管仲

雨 明  
柔 柳  
久 山  
一 具  
里 外  
多 女  
日 人  
貞 雄  
松 秀  
雲 翠  
宇 弘

陸奥

萬葉のうきうき 雀を雀  
あふやうに鳴を雀 鳴を雀  
川柳の雀を雀を雀 雀を雀  
除を雀 雀を雀 雀を雀  
ちうきうきもあうき鳴を雀  
標の柳子柳を雀 雀を雀  
かうきうきうき 雀を雀  
うきうきも雀を雀 雀を雀  
りうきうきうき 雀を雀  
雨を雀 雀を雀 雀を雀  
雀を雀 雀を雀 雀を雀

政 女  
荷 乙  
峰 洋  
河 元  
柳 美  
芳 谷  
凉 荷  
梅 宇  
寛 里  
今  
旭



麦園の二ヶ玉並ふ空雀哉  
て就の如き是廣く落雪雀  
言ふ子候く廣く今舞ひたり  
あつてもとて雪の上や何れも全  
膚の神々一落ふ初より乳  
夕照の一際ふより柳空雀  
大空も晴るるくくくく我  
性急おはせし付之頃空雀  
けの烟解きくくくく落雪  
近きや而して柳も柳空雀  
あややや切てくくくく

雪空  
落之  
今  
田  
吟  
大  
芭  
四  
山  
空  
落之

駒鳥

蜺

蜺

空雀をく耕婦下より落雪  
駒鳥の中あそびる名所一の谷  
笑ふも色くくく駒鳥の声  
はるかに遠くくく駒鳥の声  
駒鳥や落雪とふぬ山の砂利  
枕喰新の林より稲くく  
えくくの枕草くく欄干  
空雀の袖も入る枕と色  
連立や枕草子の赤くく  
日の丘一息休む如く蜺  
けくく子真の集り色蜺くく

吟  
芭  
棲  
鳳  
芳  
小  
抱  
布  
落  
空  
確



蛤

海苔

松風よりあけ物う小もあつ  
懐や一生雲るあゝ歎  
新風やよう懐よ人の夢  
海苔飯や傍上雲を一の雲  
海苔きの松よあそ屋おめ  
おのめくはくはつるのきひ  
月代やはあつくと海苔のよ  
友市や札の上の海苔一把  
新く焼く月と焼くや菴の  
ふきの新海苔飯あつと雲を  
口よのうもよ白のやま産海苔

雨

雨苔  
芭蕉  
梅雪  
西英  
蓮衣  
竹葉  
布席  
万里  
墨山  
梅亭  
大橋

新巻

新く焼くや水のきうの夕月  
人の上よあつと雲や市急の鐘  
市急のきうけえ娘の袖を  
陣雪も地は落度ん急の鐘  
陽のけや緑志をあつと急の鐘

管

節之  
初雄  
一蕙  
あま  
一甫

江戸

あ入や小粒乳新風袖あつ  
あつと人い雲るあつと  
休まふとあつとあつとあつと

武蔵

氷狐  
吐香

類題十萬句集初編春之部上終



舞臺新集

舞臺新集

年光夢

河

橋本清藏

河河

海

涼谷編

錦橋

花墨

一具菴一具

博多

類題十萬句集初編春之部中

洞海舎涼谷編

一具菴一具校合

二月

襖着と遊人 二月式

碓嶺

おとく雨降る 二月式

茅九

田のえき雪のふり 二月式

江戸

片下

あまの庫裡 二月式

涼谷

山風と連る 二月式

左衣

かおのかきと 二月式

涯美

山よりそよ風 二月式

荷堂

あまの庫裡 二月式

椿海







旅俗や俗に初牛をさるる  
初牛は持てゆき世々うけ  
その牛や持て人の愛する牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛

月 鏡  
乃 鏡  
大 梅  
素 櫟  
松 秀  
万 里  
了 是  
道 雄  
梅 宇  
全 云

春月

初牛は持てゆき世々うけ  
その牛や持て人の愛する牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛  
初牛や畑の土を耕す牛  
その牛や家畜の牛

二 丘  
新 水  
夕 山  
山 笑  
紫 石  
紫 石  
月下  
芝 菜  
桂 菜  
若 菜  
若 菜



人あをきとあをねくし其の  
其の月一わうき多あの上  
出はきんし障のうきや其の月  
船をねけり来ぬ花の月  
もよのうと釣瓶はけのうき  
一うと嘘と人きや其の月  
何とあくもきわや其の月  
群くた初秋庭の春の月  
山くもあのをや其の月  
そふき難あや其の月  
ねくし思ふはけ其の月

下松

事あ  
横河  
友之  
今  
涼  
西令  
文廣  
雨花女  
一甫  
梅序  
秋臺

後柳の多あそや其の月  
氏神の修筑今き其の月  
其の月大きあや其の月  
本坊の客あき多き其の月  
細網のかき其の月  
系つをり思ふ人き其の月  
築橋も修く核皮や其の月  
物人の厚き其の月  
雪消と町き其の月  
其の月軒の橋ね其の月  
山くもあをねくし其の月

蒨之  
田家  
昨木  
あ付  
里廣女  
休圃  
月岨  
涼谷  
一橋  
妙子  
吉木







朧月

朧の青も白もさうや春の月  
貝壳の海もさうや春の月  
葎のうさぎもさうや春の月  
山の鶴もさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月

陸奥

常陸

杜松 桃機 田島 古翠 鳳石 志水 南山 文島 南山 石竜

朧夜

朧の青も白もさうや春の月  
貝壳の海もさうや春の月  
葎のうさぎもさうや春の月  
山の鶴もさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月  
春の月の縄のうさぎもさうや春の月

管絃

菅月 葉二 崔堂 道雄 一甫 正令 菅笠 田島 香付 民安 島奈







彼岸

呼雷

出代の世に據る者なり  
出代よりよき人 梓 弓  
出代よりや実手掛の新しき  
お代より本の名を呼男うけ  
出代のあつた人あつたふと舟  
出代よりや藤よりあつたも  
出代よりやあつたも  
荒畑の六根あつたも  
町内の本戸建勢も彼岸  
萬葉の玉葉もあつたも  
神より近くあつたも

呼友 荒帆 荒月 今 南枝 草野 夕山 呼友 呼平

常陸

ちきり。梅よりあつたも  
萬の世のあつたも  
彼岸より物あつたも  
彼岸より梅あつたも  
萬葉よりあつたも  
彼岸よりあつたも  
胎よりあつたも  
岸根のあつたも  
川越よりあつたも  
岸よりあつたも

呼友 荒帆 荒月 今 南枝 草野 夕山 呼友 呼平

曾根







細井や藤袴ふたふたの川

生奥 萬依

一毛

島井や何うきやふり舟

南初

一毛

細井や神田橋おく稲荷堂

生奥

大橋

島井連行かたき屋敷

生奥

不曲

了る土よと細井鳴や坂の口

生奥

有月

春日煙やお百屋んお片

生奥

尺山

さつねの跡を移るや津く山

生奥

里井

初ねやあけ思ふ船とさ

生奥

雲什

通しきの名れ屋ん喜ぶ

生奥

湖平

山内のも木柿くん春々

生奥

節之

粒をそきき屋ん喜ぶ

生奥

涼谷

春のりややを借さるる家の

生奥

相家

春山の春ぬれくる春の

生奥

栗笑

夕暮と林も木物や春の水

生奥

多よ女

戸口より柳の春やさるる水

生奥

全

母持ぬ子の春くる春の

生奥

人

春山  
春水

春日  
初虹

西行  
小春



春海

春川  
春山

けあゝお烟の形や春の水  
 春のまゝ面うねお水をあうゝ能  
 するお水 却くは蟹の後ろに  
 休くとあうゝ春のまゝ  
 小原女うき鞋あや春の水  
 春のまゝうきもよき所は春  
 菜瓶の及ぶゝと春の海  
 春のまゝふ節あゝ春の海  
 春の川 柳の花先より春の  
 上りもあけても春のまゝ  
 春の山の麓ゝ春のまゝ山

一 具  
 一 市  
 素 櫟  
 羽 人  
 篠 山  
 何 兮  
 一 笠  
 キ 山  
 鳳 石  
 空 雲  
 深 月

春空

春雲  
初花

旅立のめゝ花 鐘はく春のめ  
 石切を後ゝ春の山  
 春のまゝお田は春の山  
 春の空 春のまゝ  
 春の戸や何處を春のまゝ  
 春のまゝ 春のまゝ  
 初花を後ゝ春の車  
 春のまゝ 春のまゝ  
 初花のまゝ 春のまゝ  
 初花のまゝ 春のまゝ

一 鳥  
 一 毛  
 一 夢  
 太 拳  
 九 蓬  
 大 梅  
 二 洞  
 九 琴  
 梅 兮  
 五 呪  
 大 梅







挿木  
苗代

風吹けりとの節々挿木  
獨りのつらきもさる挿木  
試みたりと木跡の人はさる  
苗代や種もあふる丹波の  
苗代子跡の古代の木葉うれ  
あふるや種の新とあふる  
苗代や其のさる加威  
ありとさるさるの田の種  
苗代やあふるさるの種  
苗代の馬を飼ふや山を  
苗代や一隅種さる根

羽人  
羅用  
耕要  
芝菜  
玄  
今  
竹岫  
てふ女  
桂女  
森谷  
大貴

種卸  
菜花

さるさる小嶋さるさる種卸  
菜の花さるさるさる小嶋  
さるさるさるさるの種  
さるさるさるさるの種  
菜の花や種もあふる丹波の  
さるさるさるさるの種  
さるさるさるさるの種  
菜の花や種もあふる丹波の  
さるさるさるさるの種  
菜の花や種もあふる丹波の  
菜の花や種もあふる丹波の

麻交  
菅破  
雨明  
不曲  
松秀  
羽人  
川長  
ちる  
了是  
菜花







大根花 虎杖 干蕨

蕨 獨活

魂の印を以て喰ふ大根  
蕨より席杖を中一蕨の葉  
干蕨や松竹の文に描く  
はつひの山花を描く  
早蕨や松竹の文に描く  
あつひや松竹の文に描く  
蕨の葉を以て喰ふ大根  
初蕨の葉を以て喰ふ大根  
一概に伸く蕨の文に描く  
山の花を描く  
獨活の文に描く

陸奥

宮城

一 蕨  
素考  
易足  
素考  
雁臺  
床水  
模海

蒲英公 麻蔴 種芋 杉菜

菊根分

解るゝとて喰ふ獨活  
以て喰ふ大根  
蕨の葉を以て喰ふ大根  
初蕨の葉を以て喰ふ大根  
一概に伸く蕨の文に描く  
山の花を描く  
獨活の文に描く

二五  
那菜  
疎蔴  
花束  
雄嶺  
旭丘  
月見  
布席  
菊根分







折打の疎数をききけ 藝人  
乙子や 純女くさる粟田口  
もつ月と列てよる藤 藝人  
去手の弟は一寸度つて 玄女  
乃ちも田舎に來ね 藝人  
玄女の子を合は 藝人の弟  
夕廣や 玄女 肥後を 藝人  
粟玄女より人立 藝人 且う所  
藝や 華の片を 藝人 切通  
某種屋の店に 人 藝人 人  
乙子や 四五里 藤 某流 某子

谷 一 橋 大 八 有 富 可 幸  
後 具 谷 橋 海 宮 朵 序 女 是 雄

乃ち 藤 上 子 あり 玄女  
乃ち 某 人 も あり けし 乙子  
五 六 年 某 人 あり 藝 人 那  
今 某 人 も あり 多 文 玄女  
乃ち 子 あり 某 人 初 藝  
物 子 子 羽 毛 席 色 の 乙子  
藝 人 子 あり 子 あり 子 あり  
粟 人 も あり 四 子 這 入 藝 人  
玄女 や 子 あり 子 あり 子 あり  
息 あり 子 あり 子 あり 子 あり  
夕 藝 谷 の 店 人 も あり 人 あり

管絃

玄 陶 積 乃 玄 呼 道 一 名 西 某  
女 烟 翠 子 女 友 雄 甫 村 乃 人



## 雉子

梁より海の端へて鳴く  
 芳徳中隣を憐るを  
 面影や雉子下を  
 花より雉子下を  
 云々やつて機へる  
 谷より久し新や  
 岬より走るうき  
 鳴くは雉子の  
 鶯の筑の  
 鳥の築の  
 矢を

鳥格  
 古翠  
 竹里  
 蓮子  
 抱儀  
 逢俗  
 嵐齊  
 有月  
 月岬  
 松巢

山のすくあらあ  
 了の上目  
 並松子  
 雲の  
 三尺  
 心  
 雉子  
 抱儀  
 伐  
 一畑  
 甲

大梅  
 不平  
 了是  
 大費  
 孫哉  
 不曲  
 確嶺  
 一具  
 野泉  
 抱儀  
 寄校



雛子鳴や花をいふ舟の中  
 きく鳴や花をいふ山の上  
 雲く中曲家の花や雛子の声  
 花く山く今更山のさく成  
 山くや圃の下にきく一のさく  
 明切と花をいふと雛子の色  
 花先をくく一をいふと雛子の色  
 花の白くお花をくく一をいふと雛子の声  
 雛子鳴や戸隠の山く花く  
 きぬくのさく成はくたきく声  
 吉竹の庭より雛子のちるが

南部

下之 昭眉 稻舂 南山 宇島 道雅 今 尚古 茶中 一花 云々

雛の雛子きく出はくもあはくは  
 雛きく一々花の解をえたり  
 雛子鳴や今更くく一竹の色  
 きく一花をいふと雛子のちるが  
 花く山く花をいふと雛子の声  
 雛子鳴や戸隠の山く花く  
 花く山く今更山のさく成  
 山くや圃の下にきく一のさく  
 明切と花をいふと雛子の色  
 花先をくく一をいふと雛子の色  
 花の白くお花をくく一をいふと雛子の声  
 雛子鳴や戸隠の山く花く  
 きぬくのさく成はくたきく声  
 吉竹の庭より雛子のちるが

今 春 備 秋 堂 田 菊 楊 花 醫 園 可 得 其 序 ち 々 雛 用 明



歸雁

離子啼や此夜を以て古戦場  
 久くなく立離子声もさう宛  
 月一鳴や片矢のさへ人拂  
 雁の中も林一葉や鳴る雁  
 秋の暮も林一鳴を聞けり  
 海山より鳴るや古や鳴る雁  
 鳴る雁も林一葉や鳴る雁  
 鳴る雁も林一葉や鳴る雁  
 鳴る雁も林一葉や鳴る雁  
 鳴る雁も林一葉や鳴る雁

伯父 仲女 蚕浦 芳谷 尤也 木公 凉海 一陽 巨童 赤木 鹿角

行雁

雁別

春雁

月影をのあふるはるの暈  
 夕のしりめと暮るる雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈  
 行雁の物より鳴る雁の暈

羽人 熟巢 東橋 玄々 全 素志 千之 確嶺 三枕 休圃 以蓋







丁 民 水 素 布 雲 芳 伸  
谷 校 谷 蕊 席 陳 薤 女

鳥巢

鳥交

初蛙

廣平 豐壚 素骨 榮路 多女 乃蓋 一之 嘉月 友之 為琴

蛙







田一粒小庭より布や鳴性  
あゝ性あゝ向ゝる葉屋我  
学そや性よりくゝ人なり  
鳴あゝる啼ゝ性花葉の上  
井の河ゝゝゝ子園や鳴性  
性をも習ゝる性子葉やあゝ性  
学所て鳴ゝる性ゝの性ゝの  
月夜も性あゝるゝの性ゝ  
夕暮る性あゝるゝの性ゝ  
田て鳴けり葉ゝも鳴性  
あゝるゝの性ゝの性ゝ

春山  
月峴  
子高  
三槐  
一膝  
白起  
香州  
布席  
多よ女  
斗延  
旭丘

蜂

蜂  
巢

需たゝねむゝ雨を鳴性  
灯ともやゝ性も鳴性  
更ゝ性大世界ゝ鳴ゝるゝ  
蜂もよ性あゝるゝの性  
形ゝゝ材木あゝるゝの性  
本坊の木の性あゝるゝの性  
去性をもゝ後をも鳴性  
蜂もよ性あゝるゝの性  
親あゝるゝの性あゝるゝの性  
一ツ出ゝゝ又ゝるゝの性  
蜂の巣も性あゝるゝの性

雲翠  
夢る  
不曲  
高貴  
石符  
谷後  
文来  
杜年  
一甫  
浮月  
雁臺



蛇蝶

蝶の糸やおの糸の地花堂  
 蛇の糸や心もくくや物の陰  
 蝶花や子の糸をさす上り  
 糸の糸を糸中をさす上り  
 糸の糸や蝶の糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り

陸奥

梅園 布席 茶器 小園 涼谷 今 東峰 山交 桑井 十雨 今

枝の糸や心もくくや物の陰  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り  
 蝶の糸や糸をさす上り

陸奥

月峴 和自丸 其笑 乃誓 麻交 信乐 栗笑 布席 由女 民校 了事







雙之 去 弋 山 驚 牙 禾 禾 古 芒 畝 井

有一挑馬大費  
量山樁海







雛を南毛尺く其膏の切刻  
 当子崎地も水糸や初を糸  
 昔くく生ゆきもやね初め糸  
 入お雛の初焼炭きり  
 焼炭の初く肥るや雛の魚  
 おお雛の初く肥るや雛の魚  
 四つも四つとくぬ初め糸  
 雛の初く肥るや雛の魚  
 芳子の初く肥るや雛の魚  
 雛市や買ね杖小人形  
 初め雛の玄糸は初く肥るや

夕山  
 芳帆  
 高女  
 文和  
 玄く  
 今  
 芳  
 文鵬  
 昭眉  
 邑角  
 古上

雛の中は初め糸の切刻  
 並つてく生ゆきもやね初め糸  
 法糸は初め糸の切刻  
 初め糸の切刻  
 雛を買ね杖小人形  
 市の雛は初め糸の切刻  
 法糸の初め糸の切刻  
 手糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
 雛も糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸  
 糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

具  
 和琴  
 一雅  
 比蓋  
 麻交  
 布席  
 高よ女  
 今  
 天年  
 久成



雞合

買ふきの雞も並つる扇うけ  
 羽のふれ素任は格不雞うけ  
 子のふれ素任は格不雞うけ  
 雞のひや浦屋呂屋も格めく  
 格無くはくも格もく古雞  
 ねお棚やね倉あう格はひ  
 三日月も格もくも雞一人式  
 格もくも格もくや雞の鳥  
 り急よりつる。雞の産あわ  
 鶏付一羽頂くや鶏わ  
 鶏わあつたり。あつる斗

桂 大 川 羽 宇 惟 篠 二 雄 由 桃  
 程 費 長 人 弘 子 侍 晶 嶺 葉 桃

沙丁

旅人のてう。あつる。沙丁  
 沙丁。や先走。てう。刀もち  
 佐吉の腰。薙。てう。沙丁  
 沙丁。てう。てう。てう。てう  
 手付。てう。者。てう。沙丁  
 神。てう。てう。てう。沙丁  
 八丈。てう。てう。てう。沙丁  
 沙丁。子。てう。てう。てう  
 久。てう。てう。てう。沙丁  
 二。てう。てう。てう。沙丁  
 戸。てう。てう。てう。沙丁

麻 有 茶 素 常 田 玄 谷  
 交 月 薨 志 弼 集 々 方



春霜 別霜

一書は霜の出ておぼたて  
寒風の舟に風香はて  
深月と地を霜降るを  
あはれまの雪を降るはて  
人形の松も竹もはて  
大を界松も竹もはて  
あはれまの雪を降るはて  
松をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて

氷谷 素標 斗進 大貫 松秀 永号 文鬼 美文 嘉月 戴星 十一玉

桃

千柿の味あつて  
雪舟はあつて  
松の雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて  
雪をまの雪を降るはて

元陸 文富 薪水 素白 素有 宇喜 素雄



る果を鼻もつけん桃の生  
妙子花を習ふ子も何れ桃の  
少くは桃の多う花の林こふ  
折る枝もくまなく枝よう桃の  
活と桃の花を度々て詠う  
山室や花の子をくまなく  
惜みあて月見付をくまなく  
もの花菴の枝をくまなく  
かへは花女の枝や桃の  
ゆきを鼻もつけん桃の  
上京のききくまなく

去く  
二河  
菅郷  
今  
雨村  
享校  
玄く  
吉屋  
谷後  
尺山  
高堂

櫻

桜のくまなくや桃の  
屋根を花燭をくまなく  
舟傍よりや花をくまなく  
桃のくまなくと金料理  
花子位家も何れ花の  
と花のくまなく連花の  
木綿屋のくまなく  
一花のくまなく  
花のくまなく  
瓶のくまなく  
よのくまなく

花の  
幸雄  
万里  
旭丘  
椿海  
丁  
史子  
小園  
望榮  
花の







明星の光んとすまゝに橋の如  
 常とて観るはつゝの海に  
 小舟の舟すゝはる橋の如  
 川に観る手もかきとてや橋の如  
 大舟の橋を盗む舟の如  
 雲霧の中を遠通る橋の如  
 日影を舟の舟すゝはる橋の如  
 さゝつゝ暖かき橋の如  
 舟の舟すゝはる橋の如  
 雲霧の中を遠通る橋の如

東川  
 元分  
 南山  
 二個  
 雲霧  
 雞田  
 南枝  
 西阜  
 山

陸奥

山をもちきくゝはる橋の如

村

舟の舟すゝはる橋の如

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟

舟の舟すゝはる橋の上

舟











尺の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 明の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ  
 糸の心と人との心を繋ぐ

文  
 休  
 管  
 仲  
 山  
 雨  
 山  
 雨  
 山  
 雨  
 山

若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ  
 若くして人を繋ぐ

華  
 白  
 雞  
 周  
 大  
 貴  
 子  
 伯  
 夷  
 谷  
 一  
 具  
 一  
 具  
 一  
 具











七つ物の箱を不<sup>し</sup>の<sup>し</sup>書<sup>の</sup>毛  
 吹毛は押<sup>し</sup>あ<sup>の</sup>さ<sup>る</sup>茶店<sup>に</sup>  
 至<sup>る</sup>版<sup>は</sup>是<sup>の</sup>さ<sup>る</sup>箱<sup>の</sup>さ<sup>る</sup>れ  
 世<sup>の</sup>相<sup>は</sup>誰<sup>も</sup>然<sup>ん</sup>あ<sup>の</sup>中<sup>に</sup>  
 菴<sup>の</sup>是<sup>の</sup>箱<sup>の</sup>さ<sup>る</sup>さ<sup>る</sup>  
 任<sup>た</sup>た<sup>た</sup>山<sup>に</sup>花<sup>は</sup>は<sup>は</sup>  
 酒<sup>を</sup>我<sup>も</sup>入<sup>や</sup>花<sup>の</sup>物<sup>く</sup>  
 毎<sup>々</sup>やあ<sup>の</sup>箱<sup>の</sup>箱<sup>を</sup>我<sup>も</sup>  
 吹<sup>毛</sup>は<sup>は</sup>中<sup>に</sup>さ<sup>る</sup>箱<sup>を</sup>  
 吹<sup>毛</sup>は<sup>は</sup>箱<sup>を</sup>は<sup>は</sup>箱<sup>を</sup>  
 吹<sup>毛</sup>は<sup>は</sup>箱<sup>を</sup>は<sup>は</sup>箱<sup>を</sup>







虎當 三槐 雁堂 季學 高占女 廣谷 昭雲 一雨 槐塢 布席

筆のあはるる處より木毫を  
 海苔の白や繪の色の属る程  
 海苔や若く雨の来り降

極鳴 布席

浮物の橋本毛今を梨の

力月

月宵のれをけりてめくち  
 花をよけりて一房の梨の  
 片をよけりて一房の梨の  
 梨のをよけりて一房の梨の  
 花をよけりて一房の梨の  
 片をよけりて一房の梨の  
 一房の梨のをよけりて一房の梨の  
 花をよけりて一房の梨の  
 片をよけりて一房の梨の

一 概 氏 有 兔 雁 括 一 五 周  
具 鴉 枝 ？ 得 毫 盤 具 悅 然



董

息々けく揺る昔山未山の如  
木山等やおもしろきの病瘵  
持籍の光お白くおけの如  
伸もて紫帯をくおせも  
度るももあつてもももも  
面々ねえのくもも董これ  
貝指れくあつても董片や  
お董海の度くは揺るく  
度くもももももも董これ  
お外の片おてちくく董これ  
お某の細くおくもももも

龍光  
不世  
文呂  
抱保  
今  
ちよ安  
得董  
大梅  
原所  
大告

出所

山

了あふみの世伝やく董これ  
お董機をさつてもももも  
お董の古愚痴おけの如  
おくの中は一語をすく董  
おけくは耳のつくやおの董  
董里や新くくをををくす  
おのそはつたおけくも  
おのの董おけくも  
今梅とやくく砂地の董く  
董くもももももも  
おの人もおけくも董く

辛雄  
掃く  
松香  
有以  
戴星  
芭南  
文傑  
九平  
今



咲董面まあうー一第の糸  
 ろも待持木然や花董  
 うんはーうーく度や花董  
 新像より起来る董より  
 ね所の陽よりや董より  
 何れより交ふあるや花董  
 秋の西より董より董より  
 義徳より董より舟場や花董  
 雨よりより董より董より  
 近よりより董より董より  
 春より董より董より董より

今・雄  
 呂  
 素  
 松  
 之  
 素  
 萬  
 文  
 伸  
 考

連翹

辛夷

川除の枕籠より董より  
 花より董より董より董より  
 連翹のより董より董より  
 連翹のより董より董より  
 連翹や二子のより董より  
 辛夷や董より董より董より  
 辛夷より董より董より董より  
 辛夷より董より董より董より  
 辛夷より董より董より董より  
 辛夷より董より董より董より

山  
 大  
 水  
 雄  
 庚  
 年  
 宇  
 涼  
 大  
 超







花やまを雲のさう元や花の  
 時ふりくくくくくくくく  
 ふくくくくくくくくくく  
 花やもくくくくくくくく  
 山あきくくくくくくくく  
 の花やもくくくくくくく  
 花やもくくくくくくく  
 花やもくくくくくくく  
 花やもくくくくくくく  
 花やもくくくくくくく

山吹

ふちのむきや移るやふの上  
腰のくち移るやふの腰  
ふちの美女物ふふふふ  
灯を移る小ふの集むふの  
移るふと移るやふの  
ふ山のふふふふふの  
二ふふふふふのふ  
ふのふふふのふやふの  
ふふふのふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ















春暮

暖簾もふりくると春の  
やゝまや仙のあもえ  
田のあまのあまの  
ふ忍や明るもあまの  
舟玉の灯のあまの  
うけとくもあまの  
宵の任山より春の  
あまのあまのあまの

如仙  
有  
片  
雞  
雲  
石  
李  
松  
其  
壯

春題不知

梅のあまのあまの  
杓杞を梅のあまの  
春のあまのあまの  
管のあまのあまの  
春のあまのあまの  
梅のあまのあまの  
春のあまのあまの  
春のあまのあまの  
春のあまのあまの  
春のあまのあまの  
春のあまのあまの

瓶  
孫  
有  
吟  
文  
今  
石



梅香をくは初春の紅梅  
芳名を来を古のつる

五 雨 岨

ちる花をくは初春の紅梅

出羽

蕉 素

裏口のくは初春の紅梅

秋后

秀 和

手の上のくは初春の紅梅

今 和

ふ梅をくは初春の紅梅

出羽

来 六

あかひのくは初春の紅梅

類題十萬句集初編春之部下終



